

ブラジルにおけるコーヒーの歴史で、最も重要な役割を担ってきたサントスの街。かつてのコーヒー取引所の建物は、現在コーヒー・ミュージアムとして保存されている。美しい石畳のこの一角は、「ブラジルのウォール・ストリート」と呼ばれ、栄華を築いた。



だった私は家族を助けるため奉公に出ましたが、その先がたまたまコーヒー会社でした」

小さな厨房で来る日も来る日も試飲カップに湯を注ぐ、単純な作業が彼の仕事だった。ところが少年は次第にカップから立ち上るコーヒーの香りに興味を抱き、この魅惑的なアロマを記憶していく。やがてこっそり書き溜めていたノートがカップ・テイスターの目にとまり、その正確な記述に周囲は驚愕した。

「一二歳の頃には香りを嗅ぐだけであらゆるコーヒーの分別ができました。子どもにとっては遊びの延長で、面白がつて匂いを覚えただけです」

一四歳という若さでテイスターに抜擢され、一七歳ではすでに職人として独り立ち。以来、六〇年以上コーヒーとともに人生を歩んだダビ氏だが、現在も一日四〇〇杯以上のテイスティングを行うという。世界中に彼の指導を受けたテイスターたちがおり、彼が果たした功績は計り知れない。

「目覚め前の妻に一杯のコーヒーを淹れることから私の一日がはじまります。毎日同じことの繰り返しですが、それが私にとって最良の日常です」

そう言うって笑顔を浮かべると再びコーヒーカップに対峙した。